

D × F × C 記憶喪失の天災は愛を求める

謎の旅人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女が目覚ますと見知らぬ白が続く世界。そんな意味不明な場所ので出会ったのは女神さまだった。女神と話して気づく自分の記憶喪失。

少女はそんな中、転生した。

転生した少女は家族と一緒に幸せに暮らす。少女が二十代になるころには愛する人ができた。

だが、世界は残酷で凶悪な妖怪に少女を含めた家族と愛する人が殺された。

そんな少女が再び愛を求めのお話。

※この作品はハイスクールD×F×Cのリメイク版です

※不定期更新です

目次

| | | |
|-----|--------------------|----|
| 第0話 | 記憶ないけど力を貰って転生します | 1 |
| 第1話 | 喧嘩？ よくするけど仲はとてもいいよ | 12 |
| 第2話 | やっぱり家ではママが頂点 | 21 |

第0話 記憶ないけど力を貰って転生します

あれ？ ここは……どこ？

ふと気づくと私はただ純粹な白が続く部屋にいた。床はあるが壁や天井が見えないどこまで続く部屋に。いや、この白だ。少なくとも天井はただ白いから見えないだけなのかもしれない。

ともかく私はこの場所を把握するために歩く。歩いて数十分。

周りの風景は全くと言ってもいいほど変わらない。本当に移動したのかと思うほどだ。私の知識にはここまで白い施設はない。

ん？ ちよつと待って。そういえばこんなにも明るいのに影がない！ 光源はどこ？

天井を見ても光源らしきものは存在しなかった。

「じゃあ、夢？」

こんな不思議な空間、夢以外にはありえない。

光源のほうは、まあ、色々と手段はあるが、影となるとそうはならない。

色々と考えているとそこに、

「夢じゃありませんわ」

突然声をかけられた。

「!?」

驚いた私は振り向きながらその場から跳ぶ。

いたのはイスに座る金髪の美しい女性だった。着ているのは大きな飾りのないドレスだ。そして、一番気になるのが服の上からでも分かるでかい胸だろう。

むかつ、なにあの胸！ なにあの谷間！ 小さい私に対する当てつけなの!?

正体不明の相手に抱いたのは同じ女性としてのコンプレックスだった。

ん？ なんだろう。何か違和感が……。

「……あなたは？」

警戒心を抱きながら問う。

何もなかった場所にいつの間にかいたのだ。もしかしたらこの部屋には危ないものがあるかもしれない。

「そうですね、あなた方でいう『神』と答えればよろしいでしょうか」「つまり私たちを作った本人ということ？」

「それは半分正解ですわ。わたくしが作ったのは世界ですわ。そして、生命のきっかけを作っただけ。あとは勝手に成ったというだけですのよ」

「じゃあ、私たちの知識は間違っていない？」

「そうですね。間違っていないせんわ」

何の疑いもなく言われたとおりに目の前の女性を神だと認めているのはなぜか。

それは本能的なものだ。勝てる勝てない、恐怖や尊敬とかそういうものではなく、それらとは違う何かで。

「さて、あなたからの質問は一先ず置いておいて、次はわたくしですわ。あなたの名前は？」

「はい、私の名前は……あれ？ え？」

普通のことだ。当たり前のことだ。

私は自分の名前を答えることができなかった。

そこで先ほど抱いた違和感の正体が判明した。私には自分という存在がどういいうものであったのか、覚えていなかったのだ。記憶喪失である。

「まあ、当然ですわね」

「えっ？ 当然とは？」

「あなたの記憶はわたくしが消しましたわ」

「……………え？」

私の頭の中が真っ白になる。

「ど、どういうことですか？」

「それはあなたがここにいる理由にも関係しますわ」

「……………」

そういえばなんで私は女神様と話しているのだろうか？ なぜこ

の空間にいるのだろうか？

「本来、人が死んでもこの空間に来ることはありません」

「ちよつと待ってください」

女神さまの言葉におかしな言葉が聞こえた。

「私、死んだんですか？」

「？ 死にましたけど？」

なんで女神さまは私を見て、何を言っているって顔をするんですか。あなた先ほど私の記憶を消したって自分で言ったじゃないですか。分かるわけがないですよ！

「とにかく、死んだ人はこの空間に行かずに輪廻転生の輪へ行きますわ。でも、あなたはここに来た」

「なぜですか？」

「教えたいところですけど、それを話すことになるとあなたの記憶を話さなければなりませんのよ。それはここに来たのがあなたの人生に深く関わっているからですわ。ええ、本当に深くね」

それを聞くと私が生きていたときにどんなことをしたのか怖くなってきた。

死んだとかいうのは……うん、もうあきらめた。だってどうやらそれはもう事実のようだから。

「あの、私はこれからどうなるんですか？」

本来ならば輪廻転生の輪に行くはずだった。なのにこんな所にいる。絶対に何かあるはずだろう。

「もちろん転生ですわ」

「転生？」

輪廻転生と同じでしょ？ なんでわざわざこの空間に？

「転生と言ってもちよつと違う転生ですの。その理由をお教えしますわ」

女神はチラッと私の横を見た。

私も釣られて見る。

そこにはいつの間にか、姿見があった。

その姿見に映るのは十代前半の幼い少女の姿だった。長い黒髪に

黒目の美しいというよりも、可愛いというのが似合う少女だ。

誰？　と思うが、姿見であるはずならば映っているのは私である。映っている少女は私が動いたとおりに動く。

高確率で私だ。こんな可愛い子が私というのはちよつと気恥ずかしい。

「さて、あなたに見せたいのはあなたの姿ではありませんわ」

やっぱり私か。可愛い子は私なのか。

映っているのは私のようにだ。

女神さまは手をすーつと横に振ると、姿見の少女は光の玉となった。

「えっ!?　な、何ですか!？」

「わたくしがあなたを魂にしましたの。心配しなくとも害はありませんわ」

光の玉になった私が手を動かすのだが、光の玉に動きはない。

「見せたいのはこれですわ」

光の玉になるという不思議体験に夢中になっている私に、女神さまが自分の掌の上に私よりも小さい光の玉を浮かべる。大きさからしてりんご程度。対して私はダイエツトボールほどだ。

あの光の玉と私は同じなの？　だとしたら魂？

「これも魂ですわ」

「随分と小さいですわね」

「ええ、あなたと比べるととても小さいですわね。ですが、この小さい魂が本来の大きさなのです」

「え？　あれ？　それだと私のは……」

「そう、あなたの思ったとおりですわ。おかしいのはあなたの魂のほう。異端、と言っているほどですわね」

どうしてこんなに大きいのだろうか？　特別なのは分かるが、この大きさってどういうこと？

「ともかく、あなたの魂が大きさのせいですわ。さすがにこの大きさの魂を輪廻転生の輪へ戻すのは無理ですわ、あの世界では」

女神さまは最後の言葉をわざとらしく強調した。

あの世界？ あの世界なんて言うなんてまるでほかにも世界があるみたいだ。いや、あるに違いない。

「そう、世界は無数にありますわ」

「どのくらいですか？」

女神さまなら分かると思つて言った。

「それは言えませんわ。なぜなら世界は今もずっと増え続けているのですから」

なるほど。今も増えているのならば答えようがない。

「まあ、先ほどの言葉通りあなたが生きた世界では無理ですわ。でも、別の世界ならば転生は可能ですわ。ですからあなたを別の世界へ転生することになりましたの。分かりました？」

「分かりました。でも、それってわざわざ私をこの空間に留まらせる理由になりますか？」

正直、留まらせる理由にはならない。だって女神さまだよ。世界を管理する人だよ。たかがちよつとしたイレギュラーの私程度の許可とか必要はない。勝手に私の魂を別世界に転生させればいい。どうせ女神さまに反対はできないもん。

「ええ、ありませんわ」

「だつたらなぜ？」

「正直に言ううちよつとあなたに興味がありますの」「私に？」

女神が私程度の人間に？ 女神さまが私に興味を持つなんて生きていたときの私つて一体何をしたのだろうか？ それとも魂がただ大きかったから？

記憶喪失で女神さまという高位の存在という壁が答えを出させてくれない。

「気になるような言い方をしてしまいましたけど、その理由はもちろんのことお教えすることができませんわ。それであなたに興味があるわたくしはあなたにちよつとした力を授けたいと思ひましたの」

「力？ その、力とは？」

「分かりやすくいえば、魔法などですわね」

「魔法!?!」

まさかの言葉に私は声を上げて驚く。

だって魔法だ。私の知識では魔法とかそういうのは存在しないものだってなっている。生きていた私はどうだか知らないが、今の私は魔法に興味津々だ。ぜひとも使いたいと思う。

「ええ、あなたにはその特別な力を授けますわ。もちろん超能力でもいいですわ」

魔法。超能力。

うくん、それがもらえるなら何がいいだろうか？ ん？ 待てよ。そもそもどういいう世界に転生するのだろうか？ その世界次第ではせつかくの能力が無駄になってしまう。だって攻撃系の魔法を手に入れて、魔法がない平和な世界だったら全く無意味になる。

犯罪者がいた時に使えばいい？ 犯罪者に合うのはどんな確率だ？

この通り意味がない。

「どんな世界なんですか？」

「そうですね。人間がまだホモ・サピエンスと呼ばれている時代で――」

「ちよつと待ってください！ そんな世界に生きるんですか!?!」

正直、そんな世界に転生したくはない。転生だから私もホモ・サピエンスになるのだろうが、ちよつとそれに抵抗がある。

「お待ちなさいな。まだわたくしの説明は終わってませんわ。その世界にはあなたの世界ではいなかった生物がいますの。妖怪、悪魔、天使、竜、その他数々の種類の生物が」

「……本当ですか?」

「ええ、本当ですわ。ただこれから進化する人間はその存在を知りませんけど」

「え？ なぜですか?」

「それらは異空間に自分たちの住むところを作っているからです。誰だってよく分からない生き物の住むところへ行きませんでしよう？

そういうことですわ」

私は納得するしかない。

「それで転生したあなたの種族ですけど、あなたは何がよろしいのですの?」

「え? 決めていいんですか?」

「もちろんですわ。あなたもホモ・サピエンスは嫌と思っていませんか?」

「……思っています」

さすがに今の人間の姿を知っていたら、ホモ・サピエンスのような姿にどうしても抵抗を覚えてしまう。

「そういうことなので決めてもらいますのよ。さあ、選んでくださいな」

女神さまに言われたとおり、私は考えた。

私は思う、長生きしたいと。そう思うのは、今は魂だが、私の体だ。私の体はあきらかに十代前半の小学生程度。つまり長く生きられなかったということだ。だったら長く生きられる生物を選ぼう。

私は死ぬときの記憶がないので、どんなに苦しかったかは分からないが、きつといい気分ではないのは確かだ。でも、ずっと生き続けるのは精神的に無理だろう。だから寿命があつて、寿命まで生きられる強い生物になりたい。

しばらくその条件で探して、決まった。

「決めました」

「それは?」

女神さまが優しく微笑みながら聞く。

「あの、きゅ、九尾です! 九の尾を持つ金の狐の妖怪です!」

選んだのは九尾だった。

「へえ、九尾ですの。竜とかじゃなくてよろしいので?」

「いえ、九尾がいいです」

竜だったら絶対に寿命の概念とかなさそうだ。何よりも人の姿になれない可能性があるので不便だ。だって巨大な身体に手ではなく足のみで、でかい翼があつてたくさん食べなければならない。強いのは確実だけど不便で食費が……。

逆に九尾だと強力な妖怪だって分かっているし、人の姿になれる。うまくいけば私は寿命で死ぬことができるということだ。それに個人的に九尾って好きだから。

「分かりましたわ。あなたを九尾に転生させましょう。それで全てを知ったあとで能力はどうします？　もちろん『なし』という答えもありますわ」

「もう決めていきますー！」

世界と種族を決めたときにもうすでに決まっていた。この能力があれば便利だと。

「それは？」

「自分が想像したものを作り出す能力です！」

「分かりましたわ。ただし制限として魔剣などの魔力や能力などが付与されたものは無理ですわ。そして、創造するために魔力や妖力を消費することにしますわ。いいですわね？」

「はい」

もしこの創造能力が何もいらずに使えたら、それはもう能力というレベルではない。神だ。

だからこの程度は当たり前前として受け入れる。

「さあ、そこに寝てくださいいな。あなたが起きたとき、あなたは新たな世界にいますわ」

言われて姿見の反対を見るとそこにはベッドがあった。そして、私の身体もいつの間にか人になっていた。

言われたとおりにベッドに横になり、眠りにつく。



女神はベッドの上に寝る幼い体の少女を見る。

「ふふっ、こんな可愛い子が人類を破滅へと追いやった存在とは見えませんわね」

女神の言葉のとおり、眠りについた少女は人類を破滅へ追いやった。少女が殺した人数は世界の人口の六割を超える。直接ではない

が少女が殺したと認識して間違いはない。

女神はそんな少女を優しく優しく頭を撫でる。人を何十億人も殺した少女を優しくだ。

女神にとつてこの少女はお気に入りになったのだ。お気に入りだからこそ、妖怪やら悪魔やらのいる世界へ転生させると決めたのだ。

だが、決して女神は少女を自分の自由にできるおもちゃとは思ってはいない。女神が抱いたのは愛だ。

「もしあなたが向こうの世界で死んだら、次はあなたをわたくしと同じ存在にして一緒に過ごしましょう。ずっと愛し合って」

女神だって全能ではない。ちゃんと生きている。間違うこともあれば失敗だってあるのだ。少女に対して愛を抱いても不思議ではない。

「さあ、あなたは向こうの世界で自分の望む世界を取れるのかしら？」

そう言うのは少女が何十億人も人間を殺すことになった原因が『幸せ』だからだ。

そもそも少女がこうなったのは、彼女の両親が彼女を捨てたからだ。孤児院で育った彼女は孤児院の者たちから大切にしてもらっていた。

だが、彼女が欲しかったのは両親の愛であって、たくさんいる孤児たちに向けられるような平等な愛ではなかった。少女はずっと特別な愛が欲しかった。両親が欲しかった。だから狂ったのだ。

そして、少女は天才だった。ただの天才ではない。天才の中の天才だ。

少女は両親からの愛を手に入れるために世界の技術を無理やり上げて、紛争を戦争にした。それは世界大戦となり、力を付けた少女は世界全体を敵にした。そして、最後に少女の死で終わったのだ。それが少女の消された人生。

こうなったのも狂った少女が一旦世界を壊して、また作り直せば愛をくれると思ったからだ。

愛が欲しいために起こった悲劇。たった一人の天才が起こした天災。数世紀分の技術を半世紀で手に入れた天災だ。

「あなたの愛は素晴らしいわ」

少女の記憶を思い返す女神は恍惚を浮かべ、少女の愛を感じていた。

「もしその狂った愛が私に向けられたら……」

それを思い浮かべた瞬間、女神の体がびくんと震える。女神の顔は僅かに赤く染まり、息は激しい。

女神は興奮していた。

女神は服の隙間から自分の股間に手を這わせる。

「んっ……」

指に感じる下着の染みに自分が本当に少女を想っているのだと認識し直した。

「女神であるわたくしがこんなになるなんて……。ふふ、はしたないですわね」

女神といえどちゃんと生きている。感情がある。そういう感情を抱けば、体ももちろん反応する。

女神はつい堪らず、少女に近づくと自分の衣服を脱ぎ捨て、少女の衣服も脱がした。

少女の凹凸のほとんどない未成熟の体。六十四歳であるが、その体は心と同じ時間で止まっている。

「そういえばあなたは誰にも自分の体を許していないんですけどわよね」

少女の記憶を読み、その事実についてさらに興奮してしまう。

女神は少女の唇に自分の唇を合わせ、そのまま自分の手を少女の小さな胸へ――

……
……
……

自分の欲を完全に満たした女神は自分と少女の体を清め、衣服を着る。

「ありがとうございます。そして、ごめんなさい。でも代わりにいくつか能力を与えますわ。だから許してくださいな」

女神の謝罪に眠る少女からの返事はない。

女神はベッドに腰掛け、少女の頭を撫でる。

それでようやく作業へ取り掛かった

撫でている手とは反対の手で転生のための能力や種族の力を浮かべる。その力を少女の体へと入れる。

「さて、あとは……そうですわね。九尾と言っていましたけどそれだけじゃ面白くありませんわね。吸血鬼を加えるのもいいですわね」

そう言っつてすぐさま吸血鬼という種族を加えた。

これにより少女はさらに驚異的な身体能力と再生能力を手に入れた。

「あとは……『力の泉』ですわね」

女神が言う『力の泉』とは、魔力や妖力を無限の一手前まで増加させる能力だ。無限にしなかつたのはさすがにと思ったからだろう。

女神はそれも加えた。

少女に入った能力はこれで三つだ。一つ増えているのは女神と少女が体を重ねたためだ。それによって肉体のない少女は女神の体液を魂の中に取り込み、神の力の一部を受け取ったのだ。神格を得たと言ってもいい。

女神は少女以外に誰とも体を重ねなかつたので、こんなことになるとは知らなかつた。これは誤算だ。取り除くこともできるが、面白そうと思つてそのままにすることに決めた。

「さて、これで終わりましたわ。ああ、あなたともつといたかつたのですけど、もうお別れですわ」

その気になれば女神は少女をこの場所に縛り付けることができるが、女神は少女を愛している。愛しているために少女に拒絶されるのを恐れているのだ。ばれない可能性は高いが、それでも罪悪感というものもある。

女神は少女と一時の別れを決め、最後にと眠る少女にキスをした。

「いつてらっしやい、わたくしの愛しい人」

それを最後に女神と少女は別れた。

第1話 喧嘩？ よくするけど仲はとていいよ

「リル！ もう帰るよー！」

深い森の中に幼い少女の声が響く。

それは私の姉の声だ。

リルというのは転生した私の名前だ。

私は無事に転生した。私の意識も生まれた瞬間からあったが、赤ん坊の頃はただ自分の意思に関係なく赤ん坊らしい行動をしていた。

まあ、おかげで気味の悪い子とか思われずに育ったのだが。

で、私の体だが、希望通りに狐の妖怪になることができた。ただまだ尾が一本なのはまだ幼いせいだからそうだ。どうも九尾は百年ごとに一本生えるらしい。つまり私が八百歳になれば九尾になれるということだ。

「リル、もうちょっと待って！」

離れたところにいる姉に声を上げて答える。

リルというのが姉の名前だ。

姉と言っても一緒に生まれたので、姉ではないと言えるのだが。

あとちなみに一緒に産まれたが、双子かどうかと聞かれると微妙なところだ。だって動物系の妖怪は一度の出産で数人産まれるから。

だから、一緒に産まれても顔が似ているのは少ない。

私もリルもまた似ていない。

「もうー、早くしないとママに怒られるよー！」

私の視界の隅にリルの姿が映る。

リルが着ているのは和服だ。私も和服だ。

なぜ人間がいないのに和服なんてものがあるのかは知らない。私が能力で作ったわけでもない。

リルは腰に両手を当て、頬を膨らませてこっちを見る。

同じ八歳なのに立派だなく。やっぱりお姉ちゃんだ。

で、そんな立派な姉に怒られている私だが、私が怒られているのは薬草を取るのに時間がかかっているからだ。

リルのほうはすでに背中に背負っている籠いっぱいに対し、私はま

だ足りない。

しばらく集めてようやくいっぱいになった。手に入れた薬草を籠に入れるとルリのほうへ駆けて行く。

「遅いよー」

「ごめん」

ぷんぷんと怒るルリに頭を下げる。

「リルは本当に遅いね。私と一緒になんだからそんなに遅れないでしょ。全部リルが色んなところに寄り道するからだよ！」

「うう、だって美味しそうなトカゲが……」

「もう！ リルって本当に食いしん坊ね。ご飯はパパが狩ってきてくれるんだから我慢しなさいよ」

「でも、小さいからちよつと焼くだけで食べられるんだよ。おやつにちようどいいし」

トカゲは小さいからちよつと焼くだけでカリカリになっておやつにはちようどいいのだ。

ゲテモノを食べられるようになったのは、種族も関係しているし食習慣も関係している。毎日熊とか食べてたらそういう耐性だって付く。今じゃ好物になるくらいだ。

「だからって作業中にするなって言っているの！ 何度言えば分かるの!?!」

「うう……」

もうルリはお母さんだ。うん、ママって呼んじやいそうだよ。

それに比べて私はダメダメだ。

立派な姉と落ちこぼれの妹。まさにそんな感じだ。

でも、そんなことが分かっているのに私は子どものようにはしゃいでしまう。甘えたいと思ってしまう。

やっぱり前世の記憶がないせいかな、またはこの体のせいなのだろうか。

「リル、どうしたの？ 顔、変だよ」

「むう、変は余計だよ！ 考え事をしてたの！」

「え!?! リルが考え事!?! どうしたの？ 熱でもあるの?」

本気な顔でルリは私の額にひんやり冷えた手を当ててきた。

「へえ〜どうやらルリとはよく話し合わないとダメみたいだね！」

「やるつもりなの？ ふふつ、私に喧嘩で勝ったことがないルリが私に勝とうって？ そんなの無理だよ」

「うっさい！ 今度こそ私が勝つんだから！ 今から勝負だよ！」

私たちは背に背負った籠を横に置き、対面する。

私たちの体からはまだ不安定な妖力が溢れる。

互いの顔にはこれからの戦闘への興奮が浮かんでいた。

うくん、どうも私も妖怪に転生してからというもの、こういう喧嘩みたいなことをよくするようになったんだよね。殺し合いじゃなくて戦いにだけど。

「ふつ、言っておくけどこれまでの私は本気じゃないよ！ 私にはまだ！ 隠された力がある！」

私は自分の掌に妖力を集める。それは不安定だが球の形をとった。りんご程度のサイズである。その時間は僅か十秒ほど。

「なっ!? ま、まさか妖力弾を放つことができるようになったって言うの!?! わ、私でもまだなのに……」

ふふふ、さすがのルリも私の真の力を前に驚いている。

私だってね、ずっと負けっぱなしというわけじゃないんだよ！

こつそりと、こつそりと私だって勝つための策を練って、努力をしているのだ！

そもそも妖力の操作は十歳で通うことになる学校で習うものだ。難易度は高いというわけではないが、慣れるまでとても時間がかかる。

それを私は独学でやったのだ。不安定な球だがたくさん頑張ったので僅かな時間（十秒ほど）で球にできた。この時間が早いかどうかと聞かれれば早くない、だ。

だが、独学で練習時間が少なかつたにもかかわらず、そこまで集中せずに十秒で妖力を操作したのだからすごいほうだ。

「ふふん！ 見たか、私の力！ 私はルリのように妖力が扱えないからそのままにしておくなどということにはしないのだ！ 私は妖力

を武器にした！ もうルリに勝ち目はない！」

「くっ」

ルリの顔が悔しげに歪む。

それはルリが妖力を有効に扱うことがどれだけの効果を生むのかを知っているからだ。

「大丈夫だよ、ルリ。この妖力弾はせいぜい岩を砕くくらいの威力だから」

岩を砕く程度の威力。

それは人間であれば即死、または運が良ければ重症の威力だ。

だけど、人間と妖怪は肉体が違う。人間にとって即死でも、妖怪にとっては気絶程度の威力なのだ。

「さあ、あきらめるといいよ。素直に降参しな。それで終わりにしてあげるよ」

掌の妖力をくるくると回しながら言う。

「そ、それでも戦うー！」

降参しなよとか言ったけど、ルリが決してあきらめないということは予想通りだ。

「へえ、圧倒的力を前にしても戦うと？」

きつと今の私は魔王みたいな笑みを浮かべているのだろう。

「当たり前！ 勝ち目がなくなっただってどうせ負けるなら戦って負けるんだから！」

ルリの妖力が激しく揺れる。

そうか。そうなんだね、ルリ。君は私と戦うことを決めたんだね。

ああ、愚かな姉よ。その心意気に応えて遊ばずにこの妖力弾を当てて終わりにしてあげる。

勝負開始の合図のために私は傍にある石を手取る。これを打ち上げて落ちたと同時に勝負開始だ。

「いっよ」

私の言葉にルリは無言で頷く。

私は真上に石を投げた。

妖怪という身体能力の高い私が投げた石は空高く上がる。どのく

らしいの高さかは分からない。普通に二百メートルほど高く上がったのではなからうか？

鍛えたわけでもないのにこの力。さすが妖怪だ。

しばらく睨みあったまま待っていると、約十四秒ほどで石は落ちた。それが開始だ。

私はすばやく妖力弾を放つ。

私はルリと何度も喧嘩、じゃなくて勝負してきた。だから最初にごう動かないで分かってている。ルリは慎重派で相手の攻撃に合わせで動くのだ。だから、狙いやすい。私のペースで始めることができる。

私はもう片手に先ほどよりも小さな妖力弾を作った。小さいので僅か数秒だ。

まずはその小さいほうの妖力弾をルリの足元に当てる。妖力弾はルリの足元で爆発し、土や葉が舞い、ルリの視界を悪くした。

くくく、これで確実に当てることができる。私はすばやくもう片手にある妖力弾を放った。

勝った！

妖力弾は真っ直ぐルリへ向かう。そして、妖力弾がルリに！

「きやうっ」

当たると思ったそのとき、その瞬間に視界を潰されたルリが滑って転んだのだ。

そのせいで当たるはずだった妖力弾はルリの背後にあった木を当たることになった。もちろん木は粉々になった。

「え？ あれ？」

意外な幸運で私の全力の攻撃を避けたルリは私と背後を交互に見た。

なんと間抜けな顔だ。わけも分からずポケーつとしていた。

戦いにおいてそれは大きな隙なのだが、実のことをいうと、私もう限界なの。妖力をほとんど使ったのであまり動けないんだ。

世の中には気、または霊力という、妖怪しか持っていない妖力とは違った、生物みんなが持つ力があるのだ。

だが、それでも私たち妖怪の主な力は妖力だ。妖力が尽きても死ぬことはないが、動くのが困難になる。今私がそうなっている。

「え、えっと……」

「……来るなら来い！」

ふらふらの私にルリはとことこと歩いてきて、拳を構える。私はふらふらで大して動くことができない。

「えいー！」

可愛らしい声とは裏腹にルリは私の顎を突き上げるかのように殴った。

「がっつんー！」

拳で突き上げられた私はそのまま宙へ飛ばされる。

ああ、やっぱり私がルリに勝つことはできないんだね……。さすがお姉ちゃんだ……。本当に本当に尊敬する姉だよ……。

顎の痛みを感じながら私はそう思い、私の意識はゆっくりと沈んでいった。

どれだけ時間が経ったのか分からないけど、私はルリに背負われているようだ。

私はぼんやりとする頭でルリの首に回した腕を強く締め、顔を首元に顔を埋める。そして、すーっと匂いを吸い込んだ。

やっぱりいいニオイ。

「ルリ？ 起きたの？」

「うん、起きた」

「顎、大丈夫？」

私は顎をさするがもう痛みはない。まあ、人間なら顎を粉々になるほどの威力だけどね。

「問題ないよ。もう回復した」

妖怪だからこそその防御力と回復力だ。

「よかった。ついむかついて本気でやったから」

「え!? 本気でやったの!?!」

「当たり前でしょ?」

その本気とはこの勝負（喧嘩）で本気を出さないとかではない。もう妖力がない状態でフラフラで本気で殴らずとも倒れそうな私を本気で殴ったということだ。この本気である。

「当たり前じゃないよ！ 見ての通りだったじゃん！ 本気じゃなくても大丈夫だったよ！ ルリになら分かるじゃん！」

「でも、リルがわざとフラフラしているかもしれないなかつたんだもん……」

「んなわけないじゃん！ ずっと一緒だったんだからそんなことしないうって分かっているじゃん！」

「……てへっ」

顔は見えないが可愛らしい顔で舌をチロリと出しているに違いない。

くそっ、ルリの可愛らしい顔が見られないなんて！ その分こうやって抱きつくことでよしとしよう。

「あっ、籠は？」

こうして私を背負っているということは籠を背負えるわけがない。そして、私の背中にも背負っているような感触はない。

「ほら前と尻尾」

言われてよく見るとルリは籠を前に背負っていて、もう一つの籠は尻尾で巻きつかれていた。

籠は身長に合わせていることと薬草はたくさんいるわけではないということもあってそこまで大きくはない。なので私たちの尻尾でも簡単に巻きつけることができる。

「もう歩けるでしょ？ 降りて」

「むう〜嫌だ。帰るまでこのままがいいよ」

負けたのだからせめてルリの感触を楽しみたい。

ルリは私を無理やりでも降ろそうとするが、私は両手をきつく締めて抵抗した。

「はあ……分かったよ。それでいいよ。でも、今日のデザートは私のだよ。いい？」

そういえば今日はデザートがある日だった。一週間に一度のデ

ザートの日だった。

「うぐつ、わ、分かった」

デザートを食べられないのは痛い、まあいい。ぎゅつと抱きついたり、よくするが、おんぶなんてされるのは滅多にできない。こうして喧嘩に負けたときくらいしかできない。

ルリを姉だと思ってる私としてはこうやって甘えたい。

ふむ、やっぱりこのままでよかったか。

「ただ、尻尾の籠は持つてよ。尻尾で物を持つなんて滅多にないから疲れる」

まあ、ルリの言うとおりなのであまり降りたくはないが、なんとか降りて自分の籠を背負う。

中身が薬草ということや身体能力が高いせい、やはりそれほど重さを感じない。

私は再びルリの背中に。

「ん、ちよつと！ 勢いをつけて乗らないで！」

「いいじゃん、別に。こけたわけじゃないし」

「だから！ 万が一、こけたらどうするのって言っているの！ 全くリルは！」

私は怒られているはずなのにその頬は笑みで緩んでいた。

ああ、怒られるって何か幸せ！ 家族って素晴らしい！ 愛って心地よい！

どうも私は怒られるとき、泣くだけではなくこうして幸せを感じる
ことが多々あるのだ。

実は私ってMってやつなの？ いや、なんかMとは違うと思うけど

……。

「私、怒ってんだけど。反省してくれる？」

「してるよ。してるしてる。ちゃんと反省してるよ」

「……全くしているように見えないんだけど」

「そう？ それは気のせいだよ」

「うれしそうにしているのはなぜ？」

「だってこうやってくっついてるんだもん！ ルリとくっついてい

たらどうしてもうれしくなるから。あつ、でも、反省はしているよ。
うん、本当だから」

幸せなんだからどうしても頬は緩む。

「はあ……もういいよ」

その言葉とは裏腹にルリの顔はやや赤くなって口元も緩んでいる。

これは喜んでもらえているのかな？ 喜んでいるよね。そうだよ
ね。

私は疑問ではなく確信して思えた。

だって私とルリはずっと一緒に過ごしてきた大切な姉妹だ。その
表情を見ることで、分からないときもあるが、大抵は分かるのだから。

「大好きだよ、ルリ」

「私も好きだよ、ルリ」

ふと思いを言葉にし、互いに思いを伝え合う。

私は帰るまで幸せな気分浸っていた。

第2話 やつぱり家ではママが頂点

さて、しばらくして、私の目の前にあるのは私たちの家だ。居間を合わせて六部屋あって、一つ一つの部屋も大きいというちよつと大きな一階建ての家だ。

だが、私の家は周りと比べて大きいというわけでもない。家族の人数によって部屋や大きさは変わるが、四人家族なら当たり前の大きさなのだ。

みんな持っている一般的な家だ。

まあ、私たち妖怪には人間みたいに物欲が激しいというわけではないからね。だから貧乏など存在しないし、逆に金持ちも存在しない。大きな家があったり、小さな家があったりするが、それは個人の趣味である。

お金というものは存在するが、家という高いイメージの物の物価も高くはないし、宝石なんて興味がないのでこういうところも金持ちが存在しない理由だろう。

「ルリ、そろそろ降りてよ。もう家の前だよ」

「嫌だ。そのまま家までね」

「はあ……本当に甘えん坊だね。まあ、そんなところが可愛いんだけど」

「ん？ 何か言った？」

「なんでもないよ」

私はそのまま家の中に入った。

まず目に入ったのは玄関だ。着物を着ている時点で分かるだろうが、家も和風である。だから履いていたもの、つまり草履を脱ぐ必要がある。

「ほら、今度こそ降りて」

「あーい」

ひよいと降りると玄関の脇に私とルリは籠を置き、草履を脱いだ。

ちなみに裸足だ。足袋とかは履いていない。一応そういう靴下系はあるのだが、私たち家族は履いていない。

さて、今日のお仕事も終わったし、居間に行こう！

「パパママママ〜！ 帰ったよ〜！」

「帰ったよ〜！」

私の言葉に続いてルリも言う。

居間に行くところには私たちの大好きな両親がいた。ただしパパはママに膝枕をしてもらって二人そろっていちやっついていたが。

まあ、両親が不仲というよりはいいだろう。

た、ただ仲がよすぎるのも、ちよ、ちよつと問題なんだけど……夜のアレ的な意味で。

「おう、帰ったか、ルリ、ルリ」

パパがこちらを向き、そう言う。

私たちの父だが、父の種族は実は狐ではない。狼だ。髪や尻尾や耳は灰色、いや、銀の美しい色を持っている。そして、見た目は三十代で顎鬚のあるイケメンである。

パパみたいな人っておじさまって言うんだっけ？ まあ、自慢の父である。

「おかりなさい、ルリ、ルリ」

そして、パパに膝枕をしている母だ。

私たちの母の種族は私たちと同じ狐だ。私たちと同じように耳や尻尾や髪は金である。で、見た目は二十代、いや、十代後半だ。つまり美女、または美少女なのだ。ただし胸のほうは大きいが。

それでなぜ父が狼で母が狐で、娘の私たちが狐なのかだが、これは別に母に昔狐の男がいて、その狐の男に何かあったから狼の父と夫婦になったというわけではない。

別々の種類の獣の妖怪同士で子どもを生した場合、子どもの種族はランダムで両親のどちらかの種族になるのだ。

だから私の父はパパで間違いない。

「今日は遅かったな。あと汚れているな。どうしたんだ？」

パパは微笑みながら言う。

パパは別に厳格な父というわけではない。ママといちやいちゃして私たちを大切にしてくれている家族大好きな父なのだ。

パパの言葉に私たちは笑顔が一変する。

「ちよつと喧嘩を……」

ルリは気まずそうに言う。

私もまた気まずい。

だって、

「……ほう」

パパの優しい微笑みが怒り顔になるんだもん。

優しいパパも怒ると本当に怖い。

パパは体を起こす。

「喧嘩？ 喧嘩と言ったか？ あの殴りあたりする喧嘩かあ？」

ひうつ！ やっぱり怒ってるよ！

喧嘩する度のことなのだが、やはり慣れない。いや、慣れちやいかないか。

「ご、ごめんなさい!!」

私たちはすぐさま土下座をする。

だが、そこでまた気づく、あつ、謝ったらダメだったって。だって、謝る相手はパパではなく、傷つけてしまった相手であるルリだから。パパはそう思っている。だから、ダメなのだ。

「おい、お前たちは誰に対して謝ってんだ？ あん？ 言ってみろ」

父は怒っているとき口が悪くなる。

もう誰だよって言いたいくらい。

「おら、言えー」

ぐすつ、うう……。

私たちの目に涙が浮かぶ。隣のルリはもう涙を流していた。

それを見た瞬間に私も決壊した。

「うええええええん!!」

声を出して泣く。私の泣き声でルリも声を出して泣き始めた。

パパはそれを変わず怒り顔で見ている。

「あなた、それくらいにしたらどうです？」

泣きじやくる私たちに助けが入った。ママだ。

私たちからすれば救いの手だった。

「この子たちはまだ子どもですよ。喧嘩ぐらいしてたほうが元気いいです」

「だがな、二人は女の子だぞ？ 男の子ならまだしも、女の子だ。口喧嘩ならともかく、殴り合いの喧嘩だ。想像してみろ、可愛い可愛い娘たちが妖力を使って殴りあったしして血みどろになる光景を。おまえだっと思うところはあるだろ」

「ないって言ったら嘘になりますけど……。でも、その原因の一つはあなたじゃないですか」

「お、俺？」

そのとき初めて怒り顔は崩れた。

「ええ、そうです。私はちゃんと育ててきましたし、女の子らしい遊びも教えてきました」

ママの言うとおりの私たちはママからたくさん遊んでもらったしルリと二人でできる遊びも教わった。

「それなのにあなたは何をしましたか？」

「何って……色々だ」

パパは別に私たちの世話を怠っていたわけではない。むしろ暇なときには私たちとたくさん遊んでくれた。まさに理想の父と言えるだろう。

私たち姉妹はパパが大好きなのがその証明だ。優しいけど怒ってくれるから好きだ。

「ええ、たくさんあの子たちのために遊んでくれましたものね。妻として最高父です。ですが！ あなたがあの子たちにやったことはなんでしたか!? あなたはあの子たちに追いかけてこや山を使ったかくれんぼです！」

「それが悪いのか？」

「いえ、ここまですらないんです。よかつたんです。でも！ なんて追いかけてこの相手が動物で、かくれんぼの相手が怒り狂った熊なんです!? いくら熊程度を殺せると言っても女の子の遊びじゃないでしょ！ 今までは何も言いませんでしたけど、もう我慢できません！」

怒ったときはママよりもパパのほうが怖いのだが、パパはママには弱い。

これも多分ママの勝ちかな。

「喧嘩したことで怒るのならば、そんなおかしな遊びを教えたあなたはどうなのかしら？　まさかとは思うけどあなたが教えた遊びとこの子達の喧嘩は関係ないって言うんじゃないでしょうか？」

「うぐっ……言わない」

「ならいつもみたいにただしかるだけじゃなく、あなた自身の手でちよつとは何かしたらどうですか？　そうですね、喧嘩をさせないためにあなたが相手になるとか」

「それはあの子たちに戦いを教えさせるということか？」

パパはその提案に難色を示す。

「嫌なんですか？」

「当たり前だろう。戦いを教えるということはこの拳で娘を殴らなければならぬということだぞ。俺にそんなこと……」

「へえ」

ママの目が細く鋭いものになった。

ちなみに私たちはもう泣き終えて目元を擦りながら、ルリと抱き合って二人を見ていた。

「万が一娘たちが怪我をするかもしれない遊びを教えたあなたがそれを言うんですか？」

「うっ……」

「そんな可能性のあるのよりもあなたに任せたほうがいいと思うのですけど。そのほうが知らないうちに大怪我なんてないでしょうし。それに娘が強いことに越したことはないですよ。そうですね？」

「……そうだな」

「はい、決まりです」

ママは満面の笑みでパパに言った。

やっぱりママが勝ったか。にしてもパパ。さっきの怖いのはどこへ行った？　今いるのはがっくりとうな垂れる、情けなさが目立つ父親の姿だった。

えっと、これが尻に敷かれるというやつか。やっぱりママが我が家の最強だ。

「ほら、ルリ、リル。喧嘩をしてはいけないとは言わないけど、殴り合いはもうダメよ。でも、そういうのは妖怪の本能的部分もあるから、お父さんと一緒のときにやりなさい。いい?」

「はい」

私たちにとって喧嘩はたまにやる姉妹のスキンシップの一つとして存在している。そう、スキンシップだ。喧嘩しているときだから一時的に大嫌いか思っていたりとかは全くないのだ。

喧嘩を口実に行っていると行って過言ではないほどに。

だから、もしママが本気で喧嘩は絶対にダメなんて言われたら、言葉に出さずとも何となく察して喧嘩時にばれないように手加減するだろう。

さすがの私たちもママには勝てないのだ。ママに言われたらどうしても一回でもうやらないと思ってしまう。

「これで終わりです。ほら、リル、ルリ、おいで」

これで説教は終わりと告げて、ママは両腕を広げた。その意味を理解した私たちはママにぎゅっと抱きついた。

ママは強く抱きしめる。

「お父さんはあなたたちが心配して怒っているのよ。そろそろそれを自覚して心配かけないようになさい。いい?」

「うん」

私だって前世を合わせたら二十歳くらいだ。それなりに自制できる……はずだ。

それでもやってしまうのはやっぱりこの体に引かれているのかな。この体は子どもだからそういう部分があってもおかしくはない。

そういえば前世の体もそうだけど、この体も結構可愛い。ママが美人だからきつと私も美人になるに違いない。そして、ルリもび美人になるだろう。

「あつ、そういえばリルってもう妖力を操作できるようになったの!」
ママと抱き合っただけで、ルリがそう言い出した。

えっ？　ちょよ、ちょよと？　な、何を言い出すの!?

「なに!?　それは本当か!？」

一番に反応したのはパパだった。

パパも!?

「うん！　まだ不安定だったけどちゃんと妖力弾にして放ったんだよ！」

ルリが自分のことを言うかのようにはいしゃいで言う。

「その歳でか！　まさか独学?」

「そうなの！　独学だって！　すごいよね！　私だって全く操作できないのに！」

私は二人が私がいる中で褒めたり驚いたりするので、恥ずかしさのあまりママの服に顔を押し付けて羞恥を隠していた。

ママはそんな私を頭を撫でてくれる。

それはもちろんこの歳で、しかも独学で妖力を操ったのだからすごいというのは分かっているよ。だから自分がすごくないなんて言わない。うん、私はすごい。天才までは言わないけど、才能はあるはず！　その程度には思っている。

結局私はパパとルリに褒められ続けたせいですとママにくつついたままだった。二人の会話がママによって止められたのは、一時間以上後であきらかにママも楽しんでいた。

ううっ恥ずかしすぎる……。

でも、ママに甘えることができたと喜んでいたり。

そんな日があつた翌日から私たち姉妹は仕事をしながら、パパに戦いを教えてもらえることになったのだった。

私たちはめきめきと上達していく。教えがよかったというのもあるが、やはり私たちの才能の面も大きいだろう。

始めてから数ヶ月で私は妖力の操作は完全にできるようになり、ルリもまた不安定だが操作できるようになった。

時々パパが私たちに戦うことが許してくれているので、本能的なものも発散されている。

その私の勝率は本当に低い。十回に一回勝つくらい。

うん、本当に妖力弾とか使っているのになんで低いのだろうか？
本当に不思議だ。

ただ父曰く、私は動きや策が素直らしい。だから受け身で相手の動きで変わるようなルリにとっては扱いやすいそうなのだ。

だからルリよりも妖力を上手く扱えても勝てないのだそうだ。

ま、まあ、別に私は戦闘大好きというわけじゃないから、そこまで悔しくはないから別にいいけど！

いつもそんな強がりで頑張っている。

ともかく私たちは同年代でも結構上のレベルには辿り着いたとは思う。さすがに一番上ではないだろうが。

これも全てパパが妖怪としての格がパパの同年代と比べて高いからであろう。

聞けば私たち家族が住んでいるここらの地域ではパパが一番強いらしい。

かっこいい上に強いとか何それ？ しかもママという美人さんが嫁とか！ そしてママとの愛の結晶である可愛い可愛い娘の私たち。絶対にパパって勝ち組だよ。

私も大人になったらいい人を見つけて、今みたいな幸せな家族を築きたい。

私だって結婚願望はあるもん。前世では長く生きられなかった私。だから寿命や身体能力も高い私は命の限り幸せに過ごしたい。

ただ私の旦那様になる人がすぐに見つかるとは思えない。

それはここらの地域に私たちの同世代の子どもがほとんどいないことにも関係している。妖怪は人間を基準に考えると長寿で、それ故に子どもがでにくい。何十年や何百年でようやく産まれるということが多々ある。人間のように子どもがでやすいというわけではないのだ。

パパもママも同じで四十年で私たちができたらしい。

ともかく前世の知識のせいとか同世代の旦那様が当たり前という認識のせいとか、どうしても私の意識は同世代の異性に拘ってしまっているのだ。

まあ、恋は盲目とも言おうし、そういう人が見つければそんな認識も変わるかもしれないが。

そうして私は未来のまだ見ぬ旦那様に対し、あれこれ思いながら日々を過ごしていったのだった。